2017・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

40号

2017・6-2017・11

◉特集◉ロングインタビュー

上越市立水族館館長　**櫻　健太郎**さん

見せる水族館　魅せる水族館

新水族館を核にしたまちづくりを考える

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

私の〝直江津グラフティー〟

国府・春日山・府中・直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中❹

公図を読む―土地に刻まれたまちの歴史

歴史は「今日」への手紙

北陸御巡幸 明治天皇聖蹟

私の直江津〝グラフィティ〟

笠原謙二

私の実家は旧国道八号線、黒井の先の下荒浜という地域です。もっと分かり易く言えば、中部電力の火力発電所の近所です。学区は八千浦小学校、八千浦中学校で多分市内で唯一か、もしくは大変珍しい小中一貫（笑）の学区です。小学校入学から中学校卒業までクラスメイトの顔ぶれが変わりません。一昨年、二〇年振りに同級会に出席したのですが、名簿を見ると、ほぼ九五％が上越市内在住というこれまた珍しい現象が起こっていて、またその同級会も定期的に行われていて、「仲が良いんだなあ」さすが小中一貫と感心してしまいました。

さて話題を直江津商店街に変えようと思います。当時の八千浦中学の校則は、保護者が付かずに校区外に出る場合は制服と学帽着用が校則でした。面倒な校則でしたが直江津（正確には直江津商店街）に親の同伴なく行くという事は、とってもワクワクする楽しい行事で、面倒な校則もいたしかたないことでした。兄のお下がりの黄色いサイクリング車にまたがり、全速力で直江津商店街へ。荒川橋まで九分五〇秒というのが最速記録だったことを憶えています。当時の憧れの学生服は「ベンクーガー」。これは中学校入学時には手の届かない学生服だったと記憶しています。金額的な問題ではなく単に先輩の目が怖く、二年生の後半にならないと買えない学生服だったような、そんな記憶が残っています。

その学生服を眺めるために高田の大和デパートよりも先にできた（直江津の自慢？）「丸専デパート」へ行くのが楽しみでした。そして丸専デパートの後は「柿村書店」。当時はＳＦアニメにどっぷりはまっていて「アニメージュ」や確か「ジ・アニメ」というアニメ雑誌を買いに行くのが楽しみでした。そして次は「ナルス直江津駅前店」です。当時は確か四Ｆ建て？　だったように記憶していますが、インベーダーゲームをしたり、これまたアニメの本や単行本を立ち読みしたのを憶えています。ドキドキしながら本宮ひろ志の「俺の空」を読んだりしていました…。

今の時代のように、コンビニも無いご時勢、人の目を気にせずに立ち読みできるのはナルスくらいだったと思います。

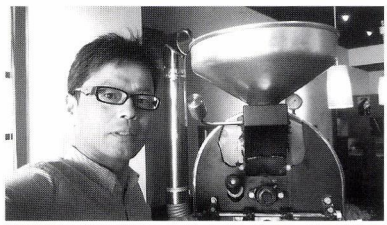
当時は、直江津商店街は宣伝カーも出ていたことも憶えています。「あったか・ふれあい、さーバンバン」というキャッチフレーズがあったような。四〇年も前なので記憶が曖昧でフレーズが間違っているかもしれません

が。ナルスのコマーシャルもあって、ペンギンの様なロゴが二体か三体並んで「♪ナルス・ナルス・ナルス・ナルス・ナルス・ナルッス、チュチュチュチュチュ♪」と。直江津は活気がありました。

そして夜の直江津商店街。代表格はやっぱり「鳥まん」。家族でよく食事にいきました。いつも焼き鳥を一人で二〇本は食べていました。その他におでんとメインはかつ丼・カツカレー・とんかつ定食・焼肉定食ｅｔｃ。最後はお腹一杯で動けない程食べました。他には名前は忘れましたが、朝市通りの入り口にあった食堂もよく行きました。美味しい思い出です。あっ！　もう一つ。朝市のどら焼きです。小さく一口サイズで食べやすく何個でも食べられました。冬の朝市の日は学校から帰って、こたつを覗くと大体入っていて、ひと肌のどら焼きをほおばったものでした。

まあ、いろんな思い出がありますが、最後に旅立ちと帰郷です。昭和五九（一九八四）年三月、大学進学のため、東京と言いたいところですが北関東、群馬へ。直江津駅から特急あさまで一人旅立ちました。そして一〇年後、平成六（一九九四）年、今度は連れ合いと二人で帰郷、直江津の栄町に居を構えました。その後、長男が生まれ、春日新田に家を建てて現在に至っています。

現在五二歳。子供の頃の直江津と現在の直江津。正直活気は無くなってしまいました。それでもあちらこちらに昔の面影も残っていて風情もあります。たまに春日新田から橋を渡ってブラブラ散歩。「ここは東京ベビー」「ここは学芸公社」なんて独り言をブツブツ言いながら歩いています。



かさはらけんじさん
昭和40年直江津市（現上越市）生まれ。
昭和59年、進学のため群馬県伊勢崎市へ。平成6年帰郷。
平成15年、春日新田で珈琲専門店「珈琲工房かさはら」店主に。
本格自家焙煎の様々なブレンドコーヒーで人気のコーヒー専門店です。ほとんど見かけなくなった喫茶店。落ち着いて珈琲を楽しみたい方にはお勧めです。
家族は4？　妻・長男・次男・ルイ（ダックス♂）11歳とのこと。

ロングインタビュー　インタビュアー　北越出版／上越信用金庫目馬直一

◆上越市立水族博物館長　櫻　健太郎さん◆

見せる水族館　魅せる水族館
新水族館を核にした
まちづくりを考える

―「水族館のあり方・楽しみ」ということと共に、「直江の津」という限定された地域的雑誌ですので、「水族館を核にしたまちの活性化」というあたりを重点にお聞かせください。

館長さんは学芸員なんですね。それから飼育技師という特別な資格も。

館長　そうです。飼育技師は日本動物園水族館協会という、特別な国内の水族館とか動物園が設けている資格です。

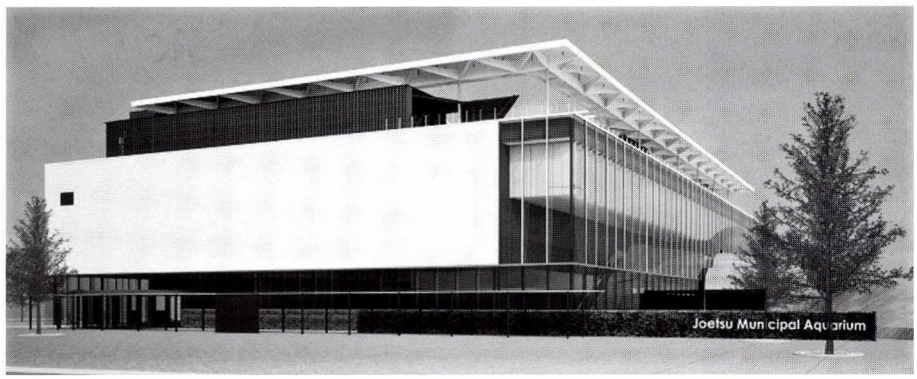
―日本動物園水族館協会というと今、イルカで話題になっている？　ずっと、そういう学芸員と飼育畑で……。

館長　そうです。飼育係を希望して入社したんですが、飼育係のセンスが無かったんですかね。早々に企画運営ですとか、実際の水族館の運営の仕事の方になりました。

「水族博物館」と「水族館」

―知人が山形県のバスツアーで、クラゲのいっぱいいる水族館（世界一のクラゲ水族館 鶴岡市立加茂水族館）が見学コースになっていて、「いい歳して、そんなところ行くかや」なんて言っていたんですが、帰ってきたらその話しばかりで、面白かったって言っています。

これは私の体験ですが、トキ鉄に乗っていたら親戚同士のグループがいて「直江津の水族館行ったか？　あそこは公立の水族館にしてはすごいな、企画が。ただ魚を



期待が膨らむ新水族館の完成予想図

見せるのではなく、見せ方がすごい」などと言っていました。当然、指定管理者という存在をご存知ない方でしょうけど、「一度行ってみれや」なんていう会話を聞きました。

それらを合わせて前置きが長くなりますが、最初に水族博物館と水族館の違いから教えていただきたいのですが、上越市になる前、直江津市立の水族館ができた時、全国で博物館法に立脚した水族館が七つで、その一つが直江津水族館。大変誇りを持っていたということを聞きました。

また直江津の水族館は、海を知らない信州方面の子供たちが必ず来るわけです。冬は休館していて、四月になると魚を入れて開館しましたというのが、必ず新聞記事になる。

当時の直江津市としては、このような子供たちを楽しませることと、博物館としての学術的な役割を果たそうという意気込みがあったように思います。

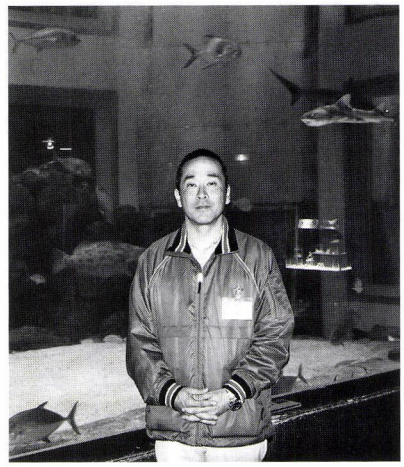
博物館としての水族館と「博物」の付いていない水族館の違いのお話のあたりから進めていきます。

館長　水族館とか動物園、植物園もそうですが、分類的にそれらの施設は博物館相当施設という呼ばれ方をしています。

博物館と同じです。ただ、博物館というと剥製であったり、標本、模型というものを展示している印象があると思います。逆に動物園、水族館、植物園というのは生命を扱っている、というところで区分けをされています。ですが実際のところは動物園も水族館も「博物学」という考え方では博物館と同じという認識です。

直江津市当時の話はあまり存知あげないのですが、横浜（八景島シーパラダイス）の施設に関しても博物館業界に関連している施設なので、学芸員を設けないといけない。職務といったら変ですが、私も学芸員としての仕事をしておりました。そういう点では違いはないですね。

近くで水族博物館というと、パッと思いつくのは寺泊（寺泊水族博物館）さんは水族博物館です。博物館という名称が付くことで、他と差別化ができるというのかなと思っていますが、役割としてはそんなに変わらないかなという現状ですね。


マリンジャンボの前で櫻　館長

―「博物」というと堅苦しい？　というイメージがありますね。

八景島シーパラダイスは、見せる施設としては非常に面白いと思います。島を横浜市から借り受けているんですね。面白いやり方だなと思います。直営（株式会社横浜八景島）の水族館というのは、仙台（仙台うみの杜水族館）と……。

館長　弊社の業務のモデルとして、たまたまなのか場所をお借りして、他者が作られたものの「運営」を任されるという感じになっています。横浜市が埋め立てた八景島を弊社で借りて施設を作って運営をしています。その他に品川（アクアパーク品川）と仙台と上越の水族館があるわけですが、品川に関しては、元々は品川プリンスホテルで作った施設でして、そこに我々がテナントとして入っているというわけです。仙台も同様です。仙台水族館開発㈱という会社がありまして、我々も出資をしているのですが、そこに我々がテナントとして入っている形です。

上越の水族館に関しては、今の施設も新しい施設も市で整備されたものに、テナントではなく指定管理者として、入っているということですね。

指定管理者として考える　上越の水族館

―市営だと、短絡的な言い方ですが硬直化した、決まりきったやり方になりますが、指定管理者のようなシステムが入ってくると、冒頭の電車の中での会話のような、「見せ方」が面白いことになるんじゃないかなと思います。

最近、話題になりましたが、「見せたがらない学芸員」と「いかにして見せる学芸員」の境目みたいなのが出てくるんじゃないかなと思っているんですが、指定管理者として、上越水族館をどのような「見え方」の水族館にしたいとお考えですか。

館長　指定管理に応募させていただいた経緯には色々ありますが、まず市民の方々に愛着を持って利用してもらう。そして市内外の多くの方に来ていただけるようにします。その中からまちを元気にする。というのがあります。

横浜八景島シーパラダイスはたくさんのお客様がいらっしゃっていますが、地元の方が協力して八景島の水族館を盛り上げているかというと、そうではないんですよね。それは品川にしてもそうですし、仙台はできたばかりで、分かりませんが現状はそうです。

しかし、上越に関しては、きっと皆様からご協力をいただけるだろうという考えもありました。上越市だけを商売にするのではなく、その周りの、我々がその時に思っていたのは、長野や長岡のちょっと手前と、せいぜいは

富山まではいかない範囲の一〇〇キロ行くかいかないかぐらいの圏内で分析して、まあ、なんとかなるだろうと判断を出たんですね。

一方で、直江津の方々に非常にお世話になっていまして、皆さんと一緒にまちを活性化していくという、我々は「ミッション」といっていますが、やりがいのあるミッションだなと思っています。

今まで水族館で私がやってきた取り組み方と全然違う取り組み方で結果を目指していけますんで。純粋に売り上げを目指していくのではなくて、結果として売り上げが付いていくという仕事ができそうだなと思っています。

―一七年間というのは長すぎるという見方もありますが、逆に一七年間だから何かやれる。例えば五年だったら、五年目で、あっ、だめだからヤメって言えますが、一七年間だとその間、赤字なら赤字がどんどん増えていくわけです。しかし、その間の一七年という長さが、逆に長期の経営を見据えたときには、いいのではないかなと、お聞きして思ったんですが。

館長　怖いですね。一七年間の最初の五年ぐらいが仮に黒字だったとして、その後、赤字だったとすると、その最初の五年間で蓄えた利益がどんどん出ていっちゃうわけですから。そこは、もしかしたらいつかは赤字に…。

現状では試算の中では途中で赤字に転換する。それをどこまで長く黒字でしていけるか、あわよくば最後まで黒字でいければありがたいなと思いますけれど。

―なかなかそのあたりの見極めが難しいなと思いますね。

館長　関東の場合は、競合も沢山ありますが、恐らくこちらは競合はいないといえば、いない。寺泊（寺泊水族館）さんと魚津（魚津水族館）さんが近いと思うのですが、どちらも七、八〇キロ離れているわけで、その範囲の人たちがターゲットになるわけです。

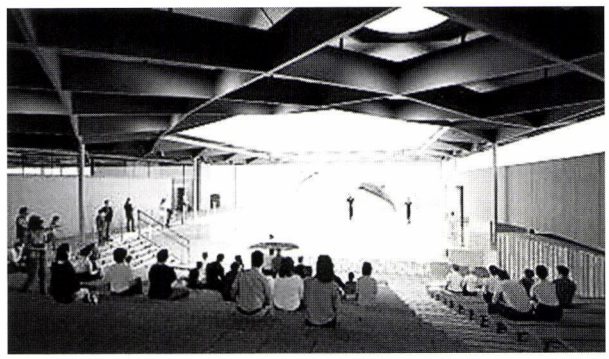
ですが、先ほどの列車の中の会話の通り、長い間、企画屋の仕事をしていましたので、どういった企画がお客様に喜んでいただけるか、というのはなんとなく分かっています。一〇〇発一〇〇中ではなくて、多分、一〇〇発一中か二中しか当たらないのですが、それでも当たるものと、当たらないものというのは感覚としては、分かっています。

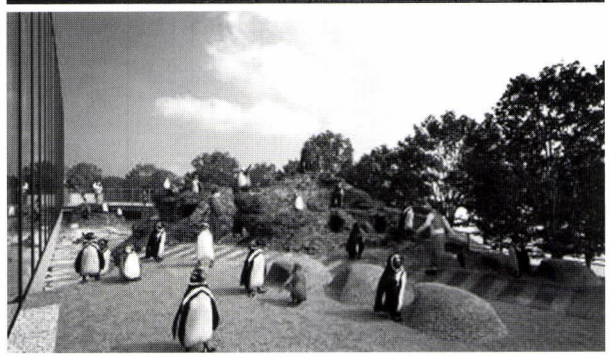
それにこの業界は、やはりどうやってメディアから情報を出せるかというのがポイントになります。どうやったらマスコミの方々に喜んでいただけて、それを見た方々が来てくれるのか、というのも、なんとなくは分かっているつもりです。そういったところを新しい施設で次々と打ち出して存在感を出していきたいと思います。

―今までＮＨＫのニュースで上越の水族館が話題になることがなかったですね。今はしょっちゅう出ていますね。びっくりするぐらい、そういう効果が出ているんだと思います。確か全国区になったニュースもありましたよね。それが集客力に…。

館長　そうですね。一昨年ですか、何回か全国ニュースになったことがありましたね。

―昔（大正から昭和初年）の直江津は、群馬県ぐらいまでが観光ＰＲと集客のエリアだったそうです。海のない







上　イルカショウプール
中　日本一の飼育数を誇るマゼランペンギンエリア
下　大水槽・水中トンネル

土地の人にとって、海を見たいという願望が強い。伊那谷で土地の人に会ったとき、「直江津です」といっただけで、なにかあこがれの目をされたことがありますし、一年の計ではありませんが、長野県の人たちは正月に、皆でがんばって働いて、今年も必ず直江津の海へ行こう！　と、家族で話し合うという話を聞いたことがあります。今でもやはり海の魚を見たい！　という人たちがいるから、夏は長野ナンバーの車ばかりです。群馬県からは横浜の方が近いですかね？

館長　そこは広報戦略的なことになるのですが、どうやったらニュース番組で取り上げてもらえるかというところが勝負になりますね。そういう意味では群馬というのはなかなか難しいかなと思います。群馬の人たちはおっしゃる通り、海水浴というと「新潟」に行くという地域もまだあるようです。新しい施設に関しては商圏としてやっていくつもりです。近い長野に関しては、重点的にしっかりとＰＲをしていきたいと思っています。

どんな水族館ができる？

―過日の上越なおえつ信金倶楽部の講演で、新しい水族館の中身について企画をどんどん見せるのではなく、つまり「手の内を晒さない」とおしゃっていましたけれど。大まかに、これが「上越の水族館なんだ」という、例えば、私たちがどこかで話題にした時の「上越の水族館ってこれだ」という眼玉……。

館長　具体的にどんな水槽があって、どんな魚がいるとかというのはお話できないのですが、今、上越市の人たちと取り組んでいるのは、日本中には三ケタに近い水族館があるわけで、その中で上越市らしさとをしっかりと

出していかないと、埋もれちゃうのかなと思います。

上越市の様々な、例えば過去に三つもお城があったような歴史のあるまちだったり、八〇年前から水族館のあるというのはすごいことですし、そういう過去の歴史を含めて、上越市しか持っていないものを施設の中で出していきたいと思っています。

水槽規模については、水の量で規模を図るのですが、この施設は二二〇〇トンで、規模としては中規模の水族館ですよ。例えば沖縄の美ら海水族館みたいにジンベイザメが泳ぐようなすごい水族館は当然、作れないですし、ジンベイザメが泳いでいる水槽だけで七五〇〇トン近くあります。ですから、とてもじゃないですが規模的なウリというのは出せません。

私どもが色々と評価いただいている、生き物をどうやって魅力的に見せるか、というところを発揮していきたいと思います。そこで、どういう風に見せるのかということを今、言ってしまうと全部ネタバレになっちゃうので。色々な人から「どうなっているんだ」と言われるんですが、「すみません。まだ、言えません」っていう（笑）。

今も中村（前館長）さんには顧問として入っていただいているわけですが、行政設置の施設は、設置の意図を明確にしなくてはいけないので、どこどこの自然を保護するためとか、色々な理由が付いて正直、あまり面白くない。その部分は一般の方には、伝わっていかないところなんですが、この施設については、とにかく人が見たいものを展示する。

中村さん曰くコンセプトがない、上越の人たちもコンセプトがないといいますが（笑）、決してコンセプトがないのではなくて、「人が見たいものを展示する」、「見た人が喜ぶ」というコンセプトを持っていたと思います。それは横浜の施設も同じ考えです。それを中村さんは二〇年以上館長として、しっかり形にして続けてきたというのは実はすごい。

―中村さんは以前、「直江の津」で「面白くて、ためになる」ということをお書きになっています。多分、そういうことだと……。

館長　中村さんは、よく笑いながら「うちに目玉なんてねえよ」なんておっしゃるんですが、逆にいうと、どれを見ても楽しい。それをずーっとやってきたというのは、すごいなと思います。ここに来てひと月ぐらい働いている中で、ここって本当にすごいな、ということを知らされました。ですから、この二年間に関しては、そこを―より洗練させる―ということをやってきたところがあります。

―その辺りなんですね。電車の中で聞いた、「公立の水族館にしては珍しく面白い」っていう……。

館長　多分、私どもが来なくてもその評価はあったんじゃないかなと思います。確かに指定管理最初の一年は約二万人、前年よりお客様を増やしました。ですが、実は八月までは前年から三〇〇〇人ぐらい下回っていました。四～八月までの運営の仕方が不慣れだったと、負け惜しみを言うことはできますが、しかし、もうすでに上越市としてやれることをやっていて、市場の開拓はできている。そこからの集客ができていたと言えるかと思います。

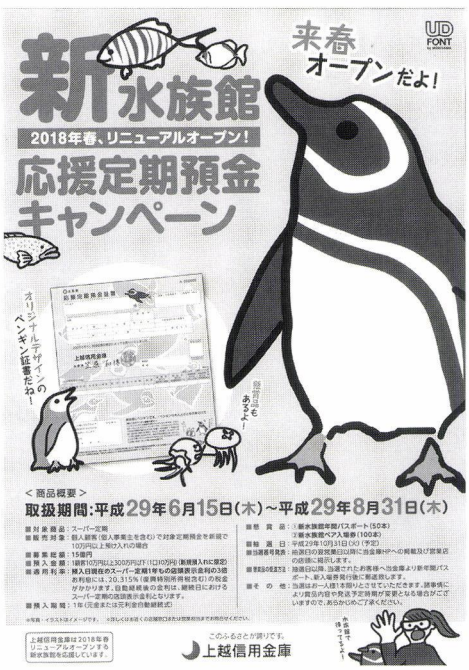
それでは、じゃあ何で二万人も増えたのかというと、九月にシルバーウイーク（数年に一度、九月にある五連休を言う）があって、イルカショーをやったんです。

それ以降、去年の八月まで、ずっと前年の入館者数を越えて続けてきたのですが、「上越市の手法としては、やはり八月のイルカショーが終わると、「これで運営終わり！」後はこれまでためた黒字をいかに食いつぶしていくか、言葉は悪いけれど「冬は、人は動かんよ」という、思いこみだったんですね」。

ですが冬は、クリスマスもあればお正月、バレンタインもあって、人が圧倒的に動く時期なんですね。関東的な考え方でいくと、同じ日本だから変わらないだろうと思うわけです。多少、雪はあるけれど、面白いものが出せれば、家に閉じこもっているわけではないから、動くだろうということで、一〇月から去年の三月までずっと色々なことをやって、昨年の一・二月に、三五年間で最高を出しました。これも我々のやり方が、というのではなくて、むしろ私たちが、ちょっと突っついて活性化をさせただけですので、その意味ではこの施設の持っているポテンシャルがやはりすごいなと、この二年間やってきて感じています。



毎月発行される水族館情報満載の「すいはく新聞」



新水族館のオープンを盛り上げようと、上越信金で発売される新水族館「応援定期預金」。年間パスポートやペア入場券が当たる。

―水族館のそういう力が、まちの活性化につながっていくと思うのですが、まちの人の中には、表現は難しいのですが、水族館に対して消極的な面があります。先ほど館長さんのお話にもありましたが、ある人が、まちの活性化に関する会議で「イルカショーが終わるともうおしまい。冬なんか誰もあんなところへ行かない」と発言したところ、前館長の中村さんが「この水族館で、入館者が一人もいなかったことは一度もありませんよ」と、すかさず反論しました。冬でもみなさん来ています。雪国に住むものとして、冬は嫌だという面もあるとは思いますが、方言で言えば「おらまちの水族館」あるいは「水族館があるまち」という意識が少ないのでは、と思うことがあります。

一生懸命やっている人には悪いですが、水族館を核に直江津駅から歩いて回遊することで、まちの活性化を図ろうという会議でも、どうしても新幹線駅が真っ先に出

てきてしまいます。

館長　難しいですね。

―たしかに、県外からの人を考えると、新幹線駅は核として重要ですが……。館長さんとして、具体的でなくても、水族館と共に直江津のまちの活性化をどのようにお考えですか。

館長　いかに直江津の駅から歩いていただく人を増やすのか。というのが一つの仕事だと思っています。

しかし、今の商圏の中で長野や長岡、新潟市まで広がったとしても、やはり車社会ですので、例えば電車で来た人に入館料を半額すると、仮にやったとしても絶対に車でくると思うんです。

街を歩いてくれる人を増やすかというと、それは車で来る圏内より外からすなわち首都圏から人を呼ぶことです。

首都圏から呼べれば、イコール海外から呼べるというふうに今はなっていますので、そこまで見据えています。

それでは、どうやったら呼べるかというと、そこは、私たちのアイディアに掛かってくるのだと思います。これはひと昔前だと難しい。しかし今はインターネットがありますので、それを使って色々な情報を発信できる。できれば、そこから世界も呼べる……。

そして、いかに若い人に来てもらうかということでしょう。

―「何ができるか」を発見できる力ということですね。若い人に来てもらいたいということですが、どのような年齢層をお考えですか。

館長　ここへきて、ちょっとしたカルチャーショックを受けたのは、「水族館は小さな子供さんの施設」だと、みんながおっしゃっていたんです。横浜では全く違いまして、いかに若い人たちを呼び込むか、若い人たちに話題にしてもらうかです。

水族館があちこちに増えて事業として成り立つようになったのは、若い人が来てくれるようになったからで、この二年間、とにかく若い人、若い人と徹底的にやってきました。

新しい施設についても若い人たちをいかに取り込むか。そこを取り込めれば、多分、若い人たち目当ての色々な事業も生まれるでしょうし、当然、雇用も生まれてくるでしょう。そうすれば、若い人たちが滞まってくれるでしょうし、戻ってきてくれる。なので、若者にも楽しんでもらえる施設を作りたいなと思っています。

―「子供」といのは、多分に教育という部分があるんでしょうね。

館長　かつては一生の中で三回しか水族館を利用しないという話がありました。子供の時に幼稚園とか遠足で来た。子供が小さい時に家族で、孫を連れて、ということです。

若者がデートで使ってくれるとなると、サイクルとして一回以上増えます。長野県の人たちは、運免許を取ると初めてのデートで水族館に行くという話も聞きました。上越の人たちがデートで来ても、お忍びも何もない



直江津駅自由通路にオープンした直江津まちなか水族館

と思うんですが（笑）、それでも彼氏、彼女ができたら、中学校でガールフレンドができたら、初めてのデートは水族館に行くっていうようなものができれば、きっと変わってくるのかなと思っています。

―海の生物を見ることは、例えば植物園や動物園に行くのとは違った、何か特別の意味があると私は思うんですが。

館長　そうですね。よく言われるのは、小さな窓を二人でのぞくことで親密度が高まりますし、水族館というのは水槽の中をよく見せるために、水槽の周りは暗いんです。そういうところでも親密度が増す要因にもなります。動物園もデートで使われますが、水族館ほどでないのは、動物の臭いですね。

水族館の裏側はすごいですが、館内では臭いを極力出さない。外には出さないというのがあります。そういうこともあって、デートスポットとして若い人が楽しむのには良い場所なのかなと思います。

―この水族館ができた時、びっくりしました。これが水族館なのかって。

館長　すごいですよ。

―大回遊水槽マリンジャンボはインパクトありましたね。

館長　この水槽をどうやってインパクトのあるものにするのか、ひと夏終わった時に取り組んだ仕事なんです。これだけ立派な水槽があるんだったら、何とかしなくてはダメだということで、水槽の照明を変えて見ました。それまで黄ばんだイメージだった水槽を海の中にいるような青い演出にして、新しい海の生き物を入れたりだとか、次々と色々なことをやらせていただきました。そこをニュースとして取り上げられたのが一年目の夏以降です。発信する機会が増えて、「あ、ここ、色々なことをやるようになった」ということで、マスコミの方に目を向けていただけたのかなと思います。

―直江津における水族館、あるいは水族館の楽しみについてお聞きしてきましたが、最後に八景島さんのCSR（corporate social responsibility）活動についておうかがいします。

館長　まさに地域活性というのが、我々がやるべきCS

Rなのかなと思っています。具体的に例えばゴミ拾いをしたりするというのもあると思うのですが、今、この施設の運営をしながら新しい施設の準備をしているところもありますので、いかにこのまちを元気にする施設を作り上げるのか。今の施設でも同じですが、当面のCSRなのかなと思います。

当然、新しい施設ができたら、また別のCSRを考えようかなと思っているんです。

―パースを見せていただくと、屋上から海が見えるようになっていますが、ここは夏の夕日がとてもきれいで、新潟市の人に聞くと、時期によって夕日が佐渡に隠れちゃう。「すごいな、ここは」とおっしゃっていました。夕日の撮影をしていた時の光景ですが、長野県から一家で来ていて、夕日を見ていた子供が感動で泣きだしちゃった。多分、この屋上で夕日を見たら、いいデートスポットになると思いますね。


新しいデートスポット　日本海夕日ゾーン

館長　指定管理に入る前の夏、初めて直江津に来たんですが、夕方、この辺を歩いていて、何か違和感がありました。何が違和感なのか考えていたら「あ、海に太陽が沈む」って。関東の人間からすると夕日は山に沈む。で海から上がって山に沈んでいく。「あっ、これが日本海側なんだ」って。みなさんにとっては当たり前のことなんでしょうけれど。

夏場であれば東京で三時ぐらいに仕事を終わらせて、新幹線でくれば充分見えますね。そのあたりを首都圏にPRしていく。これは上越市が持っているまちの武器だと思いますから、どうやって有効に活用するかということでしょう。

自分の住んでいるところの良いところは見えませんが、外の人間には分かると言われます。「これ、すごいんだよ！」って、再三言わないと……。多分、「え、すごいの？」って返されて、一回は、あっさりくじけるんですけれど、本当にすごいものであれば、しつこく言い続けていくのが大事なんだなって、こっちに来て思っています。

―自分の周辺の良さはなかなか分からない。ここ住んでいて、一年に一回も海を見たことがない、という人も大勢います。（笑）

館長　地元であれば、そうですよね。海は向こうにもあ

りますが、雪はみなさんにとっては、やっかいなものかもしれませんが、私としては雪国で仕事しているんだか毎年、楽しみに雪の時期を待っているんですが…。

―直江津は地形的に駅から砂丘を登っていますので、旅行者は駅前に立っても、海がどこにあるんだろと思うようですが、北へ向かって登っていくと、途中で潮の匂いがしてくる。「ここは海の町なんだ」って感じるようです。ですから、そこを感じてもらいながら来るという考え方もあるんじゃないかなと思いますね。

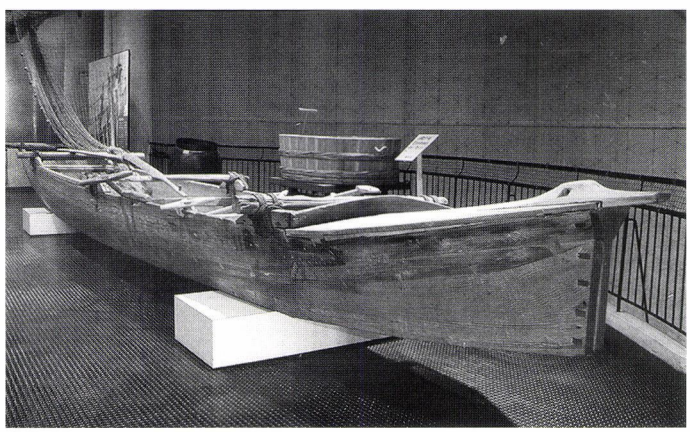
館長　そうですね。私もマヒしてしまって、全然、海の臭いを感じられない。

やっぱり潮の臭いがしますよね。安心しました（笑）。この水族館にいる人間は、マヒしているんですが、海の臭いというのは、この場所ですから、しっかりアピールしていきたいですね。

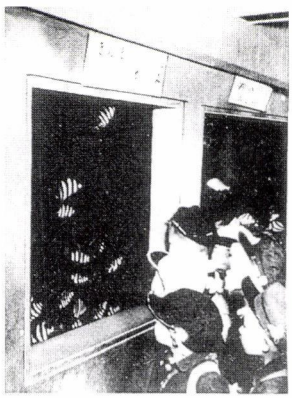
（文中の写真は水族館の愛称募集チラシより）

水族館のあゆみ

昭和　9年	直江津の八坂神社前に私立の水族館　が設置される
昭和24年	中田松三が有志と図り私立の水族館
昭和26年	直江津町主導の財団法人化
昭和28年	直江津水族博物館 （物館法による水族博物館として登録される・昭和26年制定）
昭和29年	直江津市立
昭和30年	博物館へ寄贈の「どぶね」国指定重要民俗文化財に指定
昭和32年	直江津中学校北側の松林に移転
昭和55年	現在地に移転
平成　5年	ペンギンランド・マリンスタジアム・マリンジャンボ増設
平成22年	ペンギンランド・アザラシプール・マリンスタジアム・外壁など増改築
平成27年	指定管理制度を導入で「株式会社横浜八景島」が指定管理者



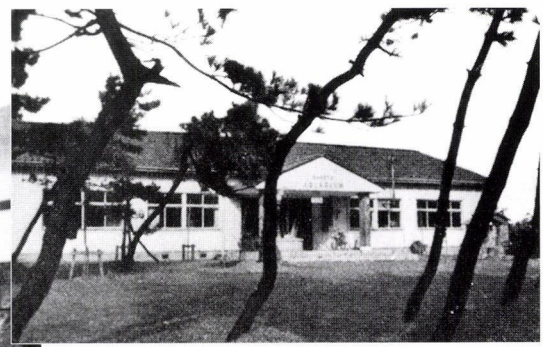
どぶね　国指定重要文化財（有形民俗）
「はなきり」と呼ばれ、頸城地域の沿岸部の地引網で使われた。軽量で船足が早く、70年以上も使用に耐えるとされている。丸木舟の造船を継承する技法で、部材の接合にはクギを一本も使わずチキリというクサビとウルシで接合している。用材は「根曲がり杉」と呼ばれる雪の圧力で根元が曲がった杉を使用している。明治34(1901)年建造。長さ10m、幅1.5m。この「どぶね」の保管展示によって「水族博物館」と位置付けられている。





昭和 24 年に開館した私立水族館
中島通りの突き当りの砂丘上にあった。入館記念の絵はがき





昭和 32 年に開館した直江津市立水族博物館
（冬期間は休館）
館の前の広場には、サルを飼う小屋があった



上越市立水族博物館
上越市発足 10 周年で建設された水族館は、外観は「どぶね」と巻貝をモチーフに、地下、地上 3 階および展望台からなり、日本海側屈指の水族博物館として注目を浴びた。
市民によって製作された外壁の陶板はホームページで保存される





「直江津振興座談会」
（前号から続く）

『おらが在所』は、昭和五年に「東京日々新聞」（毎日新聞）高田通信所が、一市三郡の名士の各座談会を開催して「新潟版」に連載、それを上越座談会集刊行会が一冊にまとめたものである。題字は史跡探訪のために訪れていた徳富蘇峰の手になる。八〇年も前の座談会は、今も変わらぬ問題を提示し、示唆に富んだ内容である。旧漢字旧かなは現代文に改め、また基本的人権かかわる発言もあるが時代背景を考慮してそのままとした。

■出席者

前列右から

佐藤　庄作　直江津商工会議所副会頭・直江津商船会社専務

村松陸三郎　直江津駅長

林　圭助　直江津町長

古川長四郎　直江津廻船問屋組合長・新潟県会議員

月橋　正樹　直江津尋常高等小学校校長

中列右から

岩島　久吉　直江津水上警察（老）水夫

眞（新）保善五郎　大成水産会社専務

上原　慶三　直江津町教育会長

中戸　賢亮　直江津青年会幹事長・宗教家（真行寺）

松岡　濱吉　古老・元水夫

田中石太郎　直江津漁業協同組合理事

後列右から

荻原直次郎　古老

大間　與作

笠本　章一　東京日々新聞直江津専売所主任

片田　温一　舞踊研究家

田中　光武　東京日々新聞記者

渡辺　善房　司会・東京日々新聞高田通信所主任



丑の日の賑わい（大正末年）

海水浴客吸集の方法如何

渡邊　中戸さん青年会として何か吸集の方法をお考えですか。

中戸　色々海岸に施設したことがありますが、なにぶん大波が来ると根こそぎ破壊されるので困ってしまいます。この前、浮き舟の計画をしましたが一ぺんで流されてしまい、これを防ぐためにいちいち監視しているわけにも行かず、まったく閉口します。

　無料休憩所や脱衣場は例年通り今年も作っておきましたが、そのまま放っておくわけにいきませんので、今年は海中へ丁字型の飛び込み台を設けることにしました。まず一カ所をやってみて大丈夫と見込みがついたら、増設するつもりです。また、小舟を各所に浮かべてみたいと思っています。

　このほか、青年会で海岸を探し歩いて、見つけ出した貸間が十数軒ありますから、表を作って、駅前に海水浴案内所を設けて、来た人々には希望に応じて貸間の案内ができるようにしました。

　将来は、金のかかることですけれども、競泳用といかないまでもプールを造ったり、善光寺浜あたりへ宿泊できるくらいのバラックを建てたい希望を持っております。

　とにかく、今までやらなかったことを今年は進んでやる方針に決めました。差し当たり、この二六日は土用の丑の日ですが、多くの人が来るばかりでは面白くないから、県土木課の浮舟を借り、沖へ人工島を造ったり、その他の施設をします。

　丑の日は一文の宣伝費も掛けずにあれだけの人を集め得るのですから、今、一段進んで、如何にして上手にこれ等の人々に金を直江津へ落とさせるをかを考えなければならぬと思います。

　また納涼展の開催なども考えています。浮舟の上に舞台でも造って海上を曳きながら所々で止まって、町の子供だの芸妓の手踊りでもやって、海岸から電光でこれを見せたり、灯籠流しもいいと思います。

林　過日、納涼展のことに就きまして、東京日々（新聞）の渡辺さんから、やるならば是非声援するからと言われましたが、青年会で趣向を考えておられるようですから、その方へお任せしたのです。

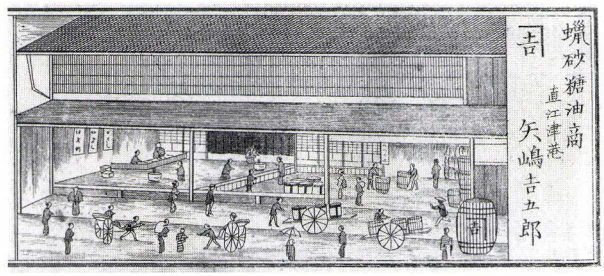
渡邊　出来るだけ声援したいと思います。

村松　駅としましては、つたや旅館の下へ無料休憩所を作り、一か月間、海水浴客に開放することにしました。毎年は丑の日だけだったのですが、今年は二十日から八月二十日までにしたのです。この費用を鉄道の方から出させたいと思って交渉したのですが、直江津は海岸が悪いから海水浴場と認めず、金は出せないと言ってきたので、鉄道クラブの費用でやりました。もっともクラブ員の健康増進と合わせて旅客の優遇を考えまして…。

　昨年、海岸で水を飲んだら金を取ったとかで、だいぶ非難の声を聞きましたが、水などは無料にして旅客をできるだけ優遇したいものです。

　谷浜方面では非常に待遇をよくし、旅客を吸集することに骨を折っていると見えて、駅で調査した所、直江津から百九十何人という人が行っている程ですから、よほどうまくやって、谷浜に負けないようにしなければいけませんね。

古川　全くなんとかして、多くの人を集めたいですね。信州の人ばかりでなく、他の地方からもね…。それにどうも直江津海岸の小屋の設備がひどすぎると思います。



蝋・砂糖・油商　矢島吉五郎
（明治 22 年刊「北越商工便覧」）

あれはあれとして、もう少し程度の高いのを一、二軒ほしいと思っています。

中戸　高尚な茶屋も必要ですね。一軒できると他も引きずられて、そうなると思いますが…。

村松　将来の計画としては、海岸に是非松原が要ります。

中戸　今あるのがもう十五、六年もたったらよくなるでしょう。

林　松原は今こしらえつつあるのですが、そう急にはできません。この間植えたのは、もうみんな根がついています。

村松　もう一つ、直江津が将来伸びていくのに非常に有利なことがあります。それは長野運輸事務所管内は消費地であるがために、貨車の到着が六分、発送が四分の割ですから、二分の定車がある。それが皆、直江津へ回ってくるのですから、これをうまく利用することです。上越線ができてもこれは変わりありませんから、この利用も直江津が永遠に生きる路の一つだと思います。

天気の話、外国人が来た話

渡邊　海岸の人達は雲を見て天気を知るといいますが、松岡さん、いかがですか。

松岡　若い時、盛んにやってる頃には面白いこともありましたが、今はもうだめです。しかし、雲を見て天気を知ることはできます。今日なども雲がだいぶ出ているが大丈夫です。

古川　榮丸の話はどうです。船長が松岡さんの天気予報を信じないで、大事を起こしたという話は…。

松岡　そうだ、十一月（昭和四？）の四日でした。二五〇〇トンの荷物を積み込んでいたのですが、だいぶ雲行きが怪しいので、船長にどのくらい積んだかと聞くと、一五〇〇トンは積んだと言うから、それでは、雨も降るし、もう止めて沖へ出ていたらどうだと言うと、大丈夫だと頑張るので、そういうなら仕方がないと思って、そのままにしておくと、夜明けの三時ころ海岸を回ってみると、まだ榮丸がいるのです。どうしたんだろうと思っていましたら、嵐のために浅瀬に打ち上げられたのです。そして、挙句の果てには横倒しにやられてしまいました。船長に「天気は所の習慣によって見なさい」と言ってやりましたが、私の言うたことを聞いて沖へ出れば、あんな目に遭わなかったろうと思います。

中戸　お天気をみるのは確かに測候所長より上手ですね。星と雲とで見るのでしょう？

古川　予感もあるのだろうね。

松岡　まず、感ですね。

林　昔、和船が入った頃の話はどうですか。

渡邊　荻原さんいかがです。

荻原　五百石船までは入ったものです。五百石船は荷を揚げてしまってから川の真ん中へ入って来たり、新川（保倉川）へ繋がったりしました。主に越中、丹波、丹後の船でしたがね、とにかく昔は盛んなもんでした。三百石、五百石くらいの船が四〇杯くらい直江津の港へ来たものです。荷物の大半は砂糖、蝋などで、矢島だの青山だのへ行きました。そして直江津から方々へ運ばれたわけです。そのころはほんとに浜は賑やかで、始末できないものが山と積まれて海岸にあったものです。

中戸　船の話で思い出しましたが、私の所で、三百年くらい前のものらしい「お達し」を見つけました。―難船した時は救助せよ―などと書いたものですが、あれなども、この港の記録としてはたいしたものだと思います。



蝋・砂糖・綿業　青山商店
（明治22年刊「北越商工便覧」）

林　そりゃ面白いものですね、この港は、昔はよほど有名な港だったのでしょう、二百年前の寛永年間の地震で大海嘯（潮津波・津波）があって、土砂が河口へ押し流され、港口を塞いだ時に、公儀から国役普請をしてもらって和船の出入りができるようになったと伝えられていますが、その後幾変遷はあったでしょうが、官費で港の工事をやったのはこれが初めてと言われています。その後、明治元年ころ政府が港の測量をしたことがあります。

上原　政府じゃないらしいです。何んでもフランス人だそうですが、榊原家でこっそりと高田のお城に品物を運ぶのに、北海道を回り直江津へ船で持って来たものらしく、そのためその仏人が築港計画書を樹て、水深や高田の稲田から下流の川についても調査したもので、私の家内の父がお船方だった関係上、その書類がまだ私の家に残っています。明治元年か慶応元年頃だったらしいです。そのフランス船の船長の名前だの、その他いろいろ書いたものは、農商学校の校友会誌の一号か二号かに詳しく載せたことがあります。その材料を全部提供しましたからね。確かに外人の名も調査書も欧文で書いたのがあるはずです。

　その時に面白い逸話があったそうです。艀に乗って直江津の人が船を訪れたところ、非常に歓待の意味で葡萄酒を出してくれたところ、直江津の人は赤いものだし見たこともないものだから、これは毒薬だというので、誰も飲まないので西洋人は不思議に思ったらしいというんですがね……。

古川　汽船ですか。

上原　そうです。

荻原　そういえば、会津征伐の兵士が直江津を通ったころ、直江津海岸へ汽船が来たというので、私も見に行ったことがありました。

古川　初めての外国船だから驚いたでしょうね。

人買の舟、身投げする人

渡邊　上原さん何か昔からの伝説とか面白いロマンスなど話してくださいませんか。

上原　厨子王丸と安寿姫の伝説がありますが、あまりに有名ですしね。「少年クラブ」だったかに長い間、連載もありました。

片田　小学校の読本にまで載っています。丹後の人買い船の話です。

古川　その遺跡として姥ヶ嶽神社があります。それ以来直江津の人は丹後の船を絶対に直江津港へ入れず、丹後の船だとわかれば綱を切って流してしまったそうです。

　それに、丹後の船が来れば必ず雨が降るものだとして、雨さえ降れば「また丹後の船が来た」といったくらいだと聞きました。

渡邊　水上警察の岩島さん、何か面白い心中物語でもありませんか。

岩島　永い間水上警察にいますが、心中は私の知っている明治三〇年後にはありません。単独の身投はありましたが…、親と意見が合わなかったり、何かで神経を起こしたりした人ですね。女も男もあります。主に長野県の人が多いようです。死ぬのは主に若い人が多く、五〇位な人がありましたが少ないですね。一昨年だったか、女の投身たくさんありましたが、一人は姑と意見が合わず、一人は病気を苦にして死んだらしいのです。それから子供を負ぶって長野県の北佐久の人だという女が死にましたし、山崎屋の下の海岸に若い二〇くらいの女が揚がっ



直江津駅前　右手に「女車力」姿が見える（昭和９年）

たこともあります。

渡邊　心中だの人の死ぬ時など何か予感でもありませんか。

岩島　ありません。ですから発見されるのは夜や朝早く海岸へ何か拾いに出る人が見つけるのです。

月橋　宿屋ではよくわかるそうです。第一に死にに来る人は荷物を持って来ないそうです。ことに女中などはよく分かるらしい。例えば来るとすぐ海を眺めて何んだか考え込んでいるような…、と思うと、ふと戸を閉めてしまったり、とにかく落ち着かないらしいですな。

中戸　停車場で鯛めし売りの声を聞いて海のあるのを知り、死にたくなってふらふらと下車して、海岸で飛び込んで助けられた人がありました。

片田　一種の魅力があるのですね。

古川　海で死ぬと言えば、昔のブリ船の話があります。紀伊国屋の蜜柑船以上の冒険譚でしてね、昔、直江津ではお正月の年取りの晩には、とてもブリを珍重したものでして、そのため北風が吹くと、逆巻く怒涛を冒してブリを満載し真帆（追い風を受けて一杯に張った帆）を張り切って一直線に能登の方からやって来るんですな。命がけですよ「生地（現・富山県魚津市）の一貫命」とまで言われたものです。一貫とは当地で一〇銭のことを言うのですが、まさか生命が一〇銭という訳ではありますまいが、とにかく大冒険をやって来たんですね。暴風に遭えばひとたまりもなく死んでしまうのを覚悟で、郷津の港に入るか、直江津の浜にブチ上げられるか、一か八かの大勝負なのです。紀伊国屋以上です。

日に滅びゆく名物女車力

村松　それから昔から有名な話として、ここの搬婦があります。女の荷車引き……労働者ですね。

佐藤　ただいまでは文明の利器自動車（大正一四・直江津に貨物自動車開業）が出来たり、女の虚栄心が強くなったりして来たゆえか、だんだん少なくなりますね。

村松　昔は日本でも有名なものだったそうですね。

佐藤　最近の娘はたいてい女学校へ入れますから、これも一つの原因でしょうね。とにかく、だんだん搬婦が少なくなるために小運送引きの料金が高くなって大いに心配している人さえあるくらいに、昔は多かったらしいですね。

古川　頭使わず女としては最も収入の多い仕事ですからね。

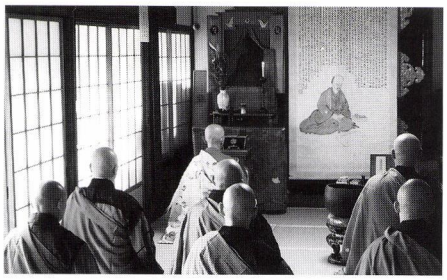
佐藤　そうです。夫が働くと同時に妻も一緒に働くという風習だったのです。そのためでしょう、直江津は一〇年間に数回の大火災に遭いながら、さほど苦にしていなかったところを見ると、割合に懐具合がよかった結果ともいわれています。

渡邊　今、どのくらいでしょう。

村松　駅へ出入りするものだけでも二百人以上でしょう。

月岡　学校から見ますと、二千六百の児童中六百五十名以上は労働者の子供で、約三分の一にあたりますね。

眞保（新保）　そのうちの六百人は鮮魚業に使われている。そのうち、昔からの魚売りは二百から三百で、あとは搬婦ができなくなって魚売りに転業した者です。昔は五年や十年、若い力のあるうちは、きっと搬婦になって働いて、歳をとって過激な労働ができなくなると、いよ



安置されている灰塚地蔵を前に毎年行われる福永十三郎の供養（徳泉寺）

いよ魚売りに変わったんですね。

灰塚地蔵尊と謡曲竹の雪

上原　魚売りの話では福永十三郎さんの話があります。時代は分かりませんが、安永六年、一五六年前の話です。十三郎さんのお祖父さんの時代に高田藩で直江津商人の生魚を売るのを禁じ、一旦、高田の商人の手に渡してから売らせることにしたことがありました。いろいろ、この禁を解いてもらうために手段を尽くしたらしいのですが、どうしても売らせなかった。この運動中、その人は亡くなり、その子は温和な人でそのままにしていたが、孫の十三郎さんというのが祖父の意思を継いで、しばしば運動したのですが、どうしてもうまくいかない。内々に探ってみると、直江津商人の売買を禁じた書付がどうも怪しいものだという話もあって、そこで福永さんは直江津の百々田権左衛門という人と糸魚川の茶商何某とを結託させ、茶売りを直江津から生魚に塩を振りかけて高田へ売りにやったところ、高田の中小町通りまで行くと案の定捕えられてしまった。そこで生魚ではない、塩魚だとばかり抗議を申し込んだが、魚はとうとう没収されてしまい、茶商は捕えられたのです。

ところが、茶商は他の領土の人間だから、早速、筋書き通り幕府へ訴え出たわけです。そこで、幕府では参考人として十三郎さんを喚びましたから、さっそく田端にある直江津商人の魚売り禁止の書類は怪しいと申し立てたので、調べたところ、公の所から出たものでないことが分かり、禁を許されて直江津商人は今まで通り魚売りに行くことができるようになったのです。

十三郎さんは、その問題がいよいよ解決することになって高田で手打ちをした席上で突然亡くなられてしまわれた。ちょうど明日が七夕さまだという前の日の一四日ですね。

月橋　旧暦の六月一四日でしょう。

上原　直江津では毒殺されたのだと、となえる者もあり、わくような騒ぎだったと言います。それも一時、あとはヒッソリしてしまったと言います。

直江津の魚売りにとっては大恩人ですからね。さっそく地蔵町に祀ったのですが灰塚地蔵というのがそれです。

田中　灰塚地蔵というのは、あの辺で遺骸を焼いたのかもしれませんね。焼いて残った灰を祀ったのでしょう。

上原　そこで地蔵町と言われたのです。

田中　今の新坂井町にあるのですね。

月橋　福永氏の先祖は越前から来たと言いまして、十三郎さんは七代目だとのことです。幕府から仮許しを受けるにあたって、下男で鯖石（福井県鯖江市の間違いか、または柏崎市鯖石）から来ている力持ちの下男を角力取りにして、その手伝いで許可証をもらわれたと言われています。

村松　神仏両方に祀られたわけですね。至徳寺の徳泉寺は十三郎さんが建てたのだと言いますね。

月橋　遺憾なことには福永氏の遺物が見つからないのです。徳泉寺にある狂歌がそうですね。

かけもののひろめの部にはなかりけり
　けふの振舞ふしのもりのぶ

村松　徳泉寺で思い出しましたが、あそこの十六羅漢とか十八羅漢とかいうのは珍しいものだそうですね。

中戸　永井真琴博士（大正・昭和の仏教学者）にいわせると十七羅漢だということです。



越の海勇三の墓（延寿寺）

田中　徳泉寺は直江津漁民が命がけで獲った魚を直江津のものに自由に売買させなかった旧藩圧政の下から、あらゆる苦心を払って町民を救った福永十三郎翁が創建せられた寺で、祖父さんと父さんの供養のために建てた寺です。灰塚地蔵尊も今この寺にあります。

渡邊　先刻、お話のありました福永十三郎翁を助けた相撲取りの話というのは、どういうのですか。

上原　十三郎翁が糸魚川の商人と一緒に上訴状を懐中にして江戸に出て、直接徳川幕府に魚売解禁の裁判を乞うた時、力を尽くした相撲取りで、この訴訟は、翁が全財産、生命まで賭して起こしたもので、宝暦一三年から安永三年まで一二年の長きにわたって続けられ、なお解決せられなかったときに、力士「越の海」は直江津生まれの江戸相撲で、当時、関脇の地位にありましたが、若いとき、福永家の下男に住み込んでいた縁故もあり、翁のために一臂（いっぴ）の力を揮（ふる）った（少しの助力を与える）わけで、当時、「越の海」は徳川氏の一門、越前宰相家の抱え力士であったので、宰相は係の役人たる勘定奉行松平伊豆守に注意するところがありました。

　伊豆守は田端商人の唯一の証拠として差し出した専売条目なるものが、印章の無い反古紙同様のものであるのを発見して、直江津側に勝訴の判決を与えたのです。直江津町民の歓喜は実に絶頂に達したといいます。

　翁の死についても、さっき申しましたように毒殺説もあります。和解の宴席上おびただしい血を吐いたので、従者に助けられ直江津の自宅に帰り、懐中から准許状を取り出し、家人に渡して静かに瞑目したというのです。しかし、本当かどうかわかりませんよ。脳溢血でもやったのではないかとも考えられますしね。

村松　中戸さんの所にも古くから伝わった話があるのですね。

中戸　謡曲「竹の雪」の遺跡は私の所だと思います。直江何某という人に月若丸という子がありましたが、故あって妻を離別し後妻をもらいましたが、ところが後妻は継子いじめを始め、ある大雪の夜、庭の竹の葉に降り積もる雪を月若丸に払って来いと命じたのです。月若丸は母の言いつけなので、庭に出て竹の雪を払っているうちに、母は突然、雨戸を締め切ってしまったのです。月若丸は冷たい雪の中で途方に暮れて泣き叫び、まさに凍死しようとしているのを人が見つけて、離縁された実母にしかと告げたので、実母は大いに嘆き駆けつけ、自分の肌に抱きしめて蘇生させたのです。これを聞いた直江は、その真情に動かされ、とうとう出家してしまいました。今、桑取村にある長松寺がその建てた寺で、そこへ入ってしまいました。

　そのあと（直江屋敷：現在の真行寺寺地）へ私どもの先祖が来たもので、そのころは寺の周りに四〇間四面の濠があったようです。

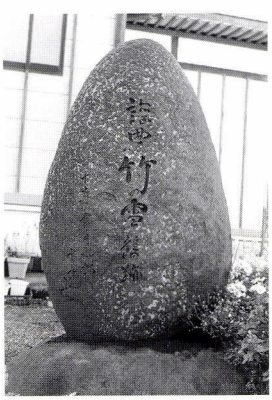
　謡曲に残っている遺跡は、新潟県県下に四カ所しかないそうです。

片田　観音寺の兜ヶ池はどうです。義経が東北地方へ落ち延びる途中、あそこへ寄って兜を脱いで休んだという話ですが。ほんとでしょうか。

古川　そんな話もあるようですね。

　以下次号

（五智保勝座談会）



謡曲「竹の雪」の碑（真行寺）

国府――春日山――府中――直江津の空間を駆ける

春日山城と越後府中 4

公図を読む――土地に刻まれたまちの歴史

小島幸雄

はじめに

私は、昭和五二年（一九七五）四月一日に上越市に採用になった。上越教育大学の建設予定地の開発で遺跡が確認されたため、富山市にいた私に声が掛かったのだ。すでに自治体職員であったので若干躊躇したが、担当する職員がいないということもあり、お世話になることを決めた。

それまでの私は、縄文時代や弥生時代、新しくても古墳時代の遺跡の調査に従事しており、奈良時代以降の遺跡を調査する機会はほとんどなかった。したがって、条里という土地区画が現在も残り、それが航空写真や公図で確認できることはもちろん承知していたし、歴史地理に興味を持っていたから藤岡謙二郎氏の著書も少しは読んでいた。だからといって、公図がどんな意味を持つのかなど、おそらく脳裏の片隅にも無かったかもしれない。

当時、新潟県の文化行政課に在籍していた金子拓男氏は、お会いするたびに春日山城付近の公図と地名の通称、直江津の公図の話をされた。私と公図の出会いは、氏に導かれたもの、といって過言ではない。

「山割り」と「屋敷割り」

図1は春日山城の最も西に位置する屋敷群の部分の公図である。○に中の文字が入っているのは大字中屋敷を意味し、同じく○大は大字大豆である。図の○中の下に柳清水とあるのは、大字中屋敷字柳清水ということだ。さて、地名はともかく線の引き方に注意してみよう。横方向に二本の線が平行に引かれているのは道で、道に直角に上下に延びる線が土地区画を示している。ここを歩くと一目瞭然なのだが、道は尾根につけられていて、短冊のような土地の区割りは斜面を意味しているのだ。私は、このような土地区画を「山割り」と呼んでいる。

さて、目を少し右に移すと大豆の蟹沢の文字が見える。柳清水の右手の蟹沢は一転方形や不正形の、いわばバラバラの土地区画の集合体のように見える。これこそ春日山城があった証なのだ。長方形の区画は空堀や土塁を示していて、方形や不正形は屋敷跡を意味しているのである。もちろん、全ての方形区割りが屋敷を示してはいない。廃城後に水田が作られた部分も方形区割りになるので、注意しなければならないのはいうまでもない。

私は、方形区割りを「屋敷割り」と呼んで、「山割り」と区別してきた。図2に公図付近の遺構図を示した。148と記された遺構が、道の三叉路に囲まれた屋敷跡である。

「山割り」と似た土地区画は、読者の皆さんが良くご存知の町家の区画であることに気付かれたであろう。

「山割り」というのは極めて理にかなった土地区割りで、生産性（植生）の違いを利用して土地を分配することで、生産物の標準化を目的としたものであったのだろう。尾根に道があることは前述した。そうすると、尾根に近い斜面の上方は土地の水分含有量が少ない。斜面を少し下がると水分が多くなり、裾野は沢になるので水が流れている。植生は、上方から松、中間が杉、裾野は雑木や草が生い茂る。言い換えると、松と杉は建築用材として利用され、沢の雑木は薪炭になり、山菜も取れたであろう。土地を利用しつくすための共同分配の理念に基づいた土地区画だったのだろう。

町家も同じだ。町家は道路に面して「ミセ」と呼ばれる玄関が作られて、「チャノマ」・「ザシキ」と裏の小路まで細長く建築される。家の中ほどには箱庭のような部分があり、雪下ろしをするとその中庭の池で融雪もできる。裏も道路に面しているので、住民は皆同じ環境で生活していることになる。ある家が特別な環境を享受するのではなく、住民が皆等しい条件で生活してきたといえる。

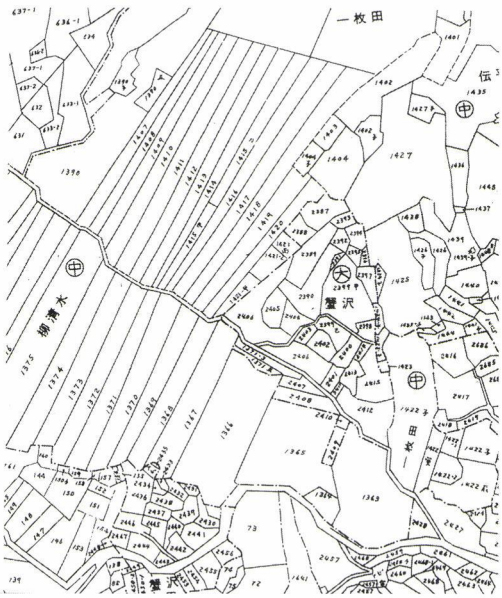


図１　春日山城跡西端附近の公図



図２　同じ区域の遺構図

「浜割り」砂浜の土地区画

短冊に割られる土地区画は、「山割り」や町家に限らない。『大潟町史（自然編・歴史編）』の第三章第四節の「漁業と製塩業」に、まさに短冊割りの土地区画の例が掲載されているので引用させていただいた。図３を見ると、日本海に面して白地の部分があり、その背後に短冊形の地価区分一等の土地区画が個人持分として並んでいる。その背後には大字持分とあるが、もちろん共有地であるから区画が存在していない。さらに内陸に進むと荒

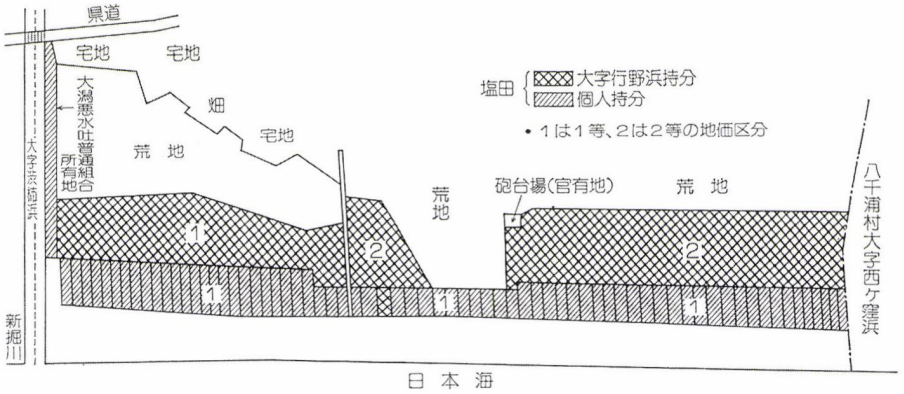


図３「大字行野浜塩田分布図」（大正４年土地台帳・地籍図より黒崎清与作成「大潟町史」より）

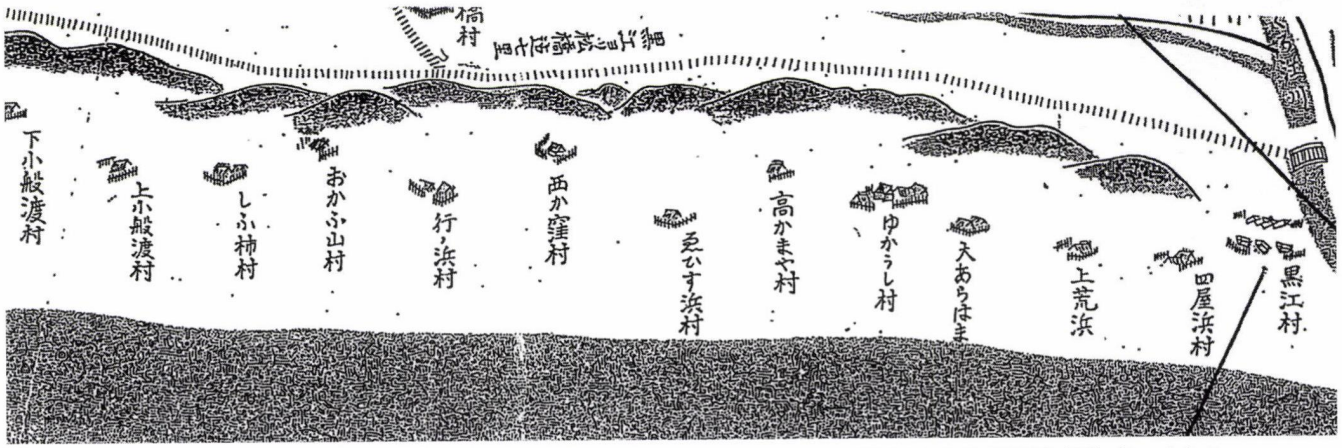


図４　慶長２年 (1597) 越後国絵図のうち頸城郡 (原図は縦 430× 横 684cm「高田市文化財調査報告書」より)

地とあり、防砂林を兼ねた塩炊きのための薪炭林と理解できる。県道には家が並ぶが、町史では記載が無いものの短冊に土地区画がなされていたであろうことは推測可能である。

私は、これを「浜割り」と呼んで、「山割り」と同じものと理解している。

以前、八千浦地区でお話をさせていただいた際、大字ごとの土地区画をとり上げたことがある（図４）。慶長二年（一五九七）に制作されたとされる絵図に日本海に面して整然と並んで集落が描かれている（絵図の制作はもう少し古いとする意見もある）。この理由を製塩と関連付けて考えることで理解しようと試みたのである。同じ絵図の他の村々では家があり、水田と考えられる表示があって、その周りを区画しているような描法である。それに対して日本海に面した部分は、海に面しては何も描かれず、家の周りを柵（防砂林？）で囲い、背後に山並み（砂丘）の描写が見られる。以前、八千浦地区の公図を拝見したとき、各村の境界が海岸線に対して直角で



図５　居多神社絵図（「上越市の文化財」より）

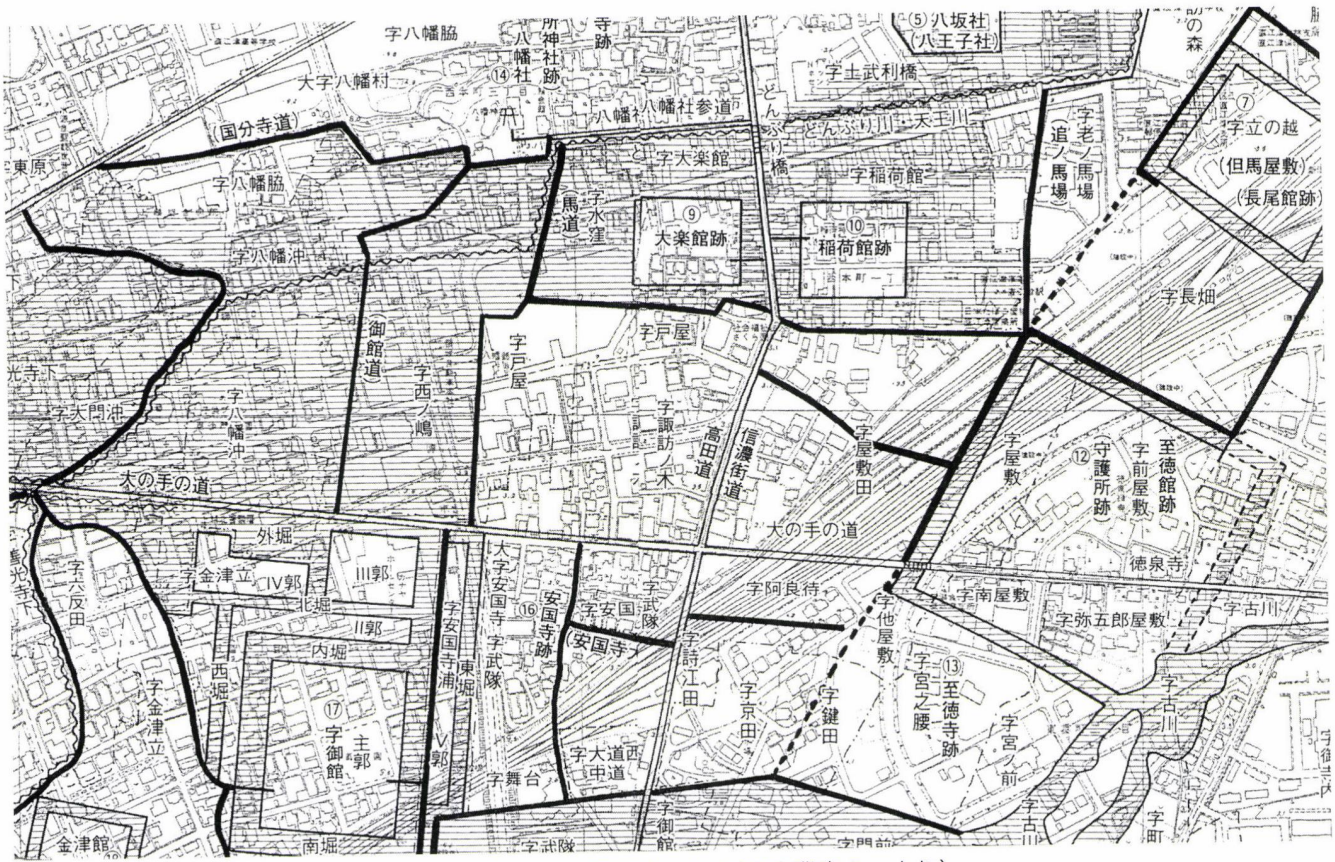


図6　越後府中の区割り（「上越市史叢書8」より）

あったと記憶していた。浜を割ることで、各村々が海という共有の財産から均等に生産が分配されることができるようにしたのであろう。

このことに気付かされたのは、居多神社文書にある絵図であった。図5の絵図は長く真贋の議論があったが、本物であると確定して、現在は上越市の文化財に指定されている。絵図に描かれたのは、日本海、浜、神社、山と周辺の目印であり、海に朱線が引かれていたことで、塩田と薪炭の供給を安堵する絵図であることが分かったのである。この絵図と、公図によって「浜割り」の存在を知りえたのであった。

直江津を見る

さて、春日山城の公図から塩田の話になってしまった。はじめにで書いたように、私は上越にお世話になってからずっと公図と向き合ってきた。そして、今もそのやり方は変わらない。遺跡を発掘するときは、まず最初に公図を見る。丘陵の調査では、「山割り」と「屋敷割り」を探して地形を見たり、山城の存在を考える。水田部の調査では、公図で古い地形、特に川の存在を想定して自然堤防を探す。自然堤防に人が住んだのだ。平地ではもう一点、堀のような方形の区画を探す。館を探すのだ。これも楽しい。「館＝タテ」と「竹＝タケ」については前に書いたので参考にしてほしい（本誌三六号）。

直江津に目を転じよう。図6は、「上越市史叢書8　考古―中・近世史料―」に掲載されている直江津の中世の町割りを復元したものである。金子拓男氏の労作で、中世の直江津を考える上で欠かせない図である。

本図を元に、図上で直江津を歩いてみよう。図の中ほ

どを左右（東西）に走る道がある。大の手の道と呼んでいる。読者の皆さんがよくご存知の「御館」は、その大の手の道と平行に造られていて、「館」の尊称がついている。道の上方の中央やや右には「大楽館」と「稲荷館」があり、いずれも「館」の尊称がつく。ところが、「御館」よりもさらに大きな区画でありながら「館」尊称がなく、「屋敷」として名があがっている区画がある。最も大きな区画はこれまで「至徳寺跡」とされてきた「守護所跡」推定地である。もう一箇所、字長畑をはさんで同じ方向を向く大きな屋敷跡は、守護代長尾氏の屋敷と推定さているが、小字は「立の越」といって「館」とは記されない。「館」尊称については、すでに三六号で述べたので多くは記さないが、上杉謙信が実権を握る以前の館であったと推測できる。もう一点、守護所の上を道が横断していることだ。都市計画は、最初に道路計画が立てられ区画が決まり、建築物は決められた区画道路に沿って立てられていく方形の館の区画に斜めに意匠される建築物はないだろう。そうすると、大の手の道は守護所権力の失墜以降に計画され、「御館」はその区画によって建てられたことになる。

なお、大の手の道の構築年代には諸説があり、年代の確定にいたっていないことを付記する。

直江津の小路

昨年のリオデジャネイロオリンピック閉幕直後、いや閉幕した記事が掲載された日といったほうが正しいかもしれない日の「新潟日報」に一九五八年に撮影された写真が一枚掲載されていた。能生町の小路でフラフープに興じる子供の姿はとても懐かしかったが、それ以上に小路の景色、道と下水と家々の壁板に目が奪われた。

私が発掘というものを知って、今年で五〇年になる。そのうち、最初の一〇年を除けば四〇年間春日山城と向き合ってきた。おのずと訪れる遺跡も中世や館などが多くなり、発掘した遺構も多く見てきた。ところが、昨年の新聞記事の写真は私を六〇年前にタイムスリップさせたばかりか、私がこの四〇年間見てきた中世の遺構を髣髴とさせるものだったのだ。砂利敷きの道の両脇には大きめの漬物石を積み上げたような下水が造られていて、まさに中世遺跡の館の「区割り溝」や道路遺構に付属する「石組み溝」の姿だったのである。

私はこの記事を見て、発掘して出土する石組みの溝を何の違和感もなく受け入れられたのは、まさに実体験としてその下水とともに生きてきた証だと感じた。遺跡から出土したものを民俗例などから推測することはよくあることで、どんな概説書にも記載されているのを目にする。しかし、私はその中で生きていたことを新聞記事によって呼び起こされたのだった。

直江津の町歩きを案内されたときに、ガイドさん（佐夫氏）に連れられて小路に入った経験がないだろうか。





写真１
長峰城跡の杜（保存会提供、本丸は↓附近）

これこそまさに、現代から過去に、大げさなことを言えば現代から江戸時代を飛び越えて中世にタイムスリップすることだと思う。

もう一度図6に戻ろう。この図をよく見ると、西本町の通りや中央、いわば旧国道に面している建築物は間口より奥行きがずっと長い、いわゆる短冊の区割りになっている。これは中世の区割りではなく、直江津が町になってからのものであろう。中世都市越後府中はおそらく短冊地割を持たない、方形区割り「屋敷割り」の町だったと思われる。小路を入ると目に飛び込む方形の道路区割りは、まさに中世の面影を残すものであろうし、目を凝らせば今でも中世が息づいているかもしれない。ぜひ、ガイドさんと一緒に小路を探索し、中世越後府中を探していただきたいと願っている。

中世から近世へ――結びにかえて――

昨年、「長峰城ものがたり」というパンフレットが、「越後長峰城址保存会」から発行された（写真1、保存会提供）。長峰城の存在は承知していたが、恥ずかしい話だがそんなに気にすることも無く、牧野（忠成）さんがいた城か、くらいの認識だった。ところが四月か、それとも五月だったろうか、保存会の上野さんが訪ねてこられ、一緒に現地も見させていただいた。まさに近世城郭そのものではないか、という驚きとともに城の立地に感銘を受けた。水運の城と思えたからだ。

ここでも、私の公図好きが本領を発揮した。まさに、「屋敷割り」と「山割り」に」よって構成された城跡独特の公図だったからだ。図7は明治の公図（写し）を保存会から頂いたものだ、中央の太い線の「屋敷割り」が本丸、左端や本丸の下方の「山割り」が堀だったのだ。まさに城の公図にふさわしいものであった。

地名の言い伝えもいい。「船着場」は、城の立地とともにこの城が果たすはずであった機能を暗示している。北側の砂丘では製塩が行われていたであろうし、後背湿地を挟んで南の自然堤防には水田耕作を生業とする村があった。長峰城は、これらの生産物を運搬する舟が行き来しやすい土地を選んで築城されようとしていたのだろう。

残念ながら完成を見ていないようである。中世から近世への過渡期に計画され途中まで工事が行われた城跡を、保存会とともに大切にしていきたいものである。

長峰城が築城された時期は福島から高田に城が移ってまもなくである。この少し前、越後府中も直江津から移動して姿をかえていくのだ。府中を変える。これが越後の中世から近世への移行する儀式だったかもしれない。

（上越市専門学芸員）

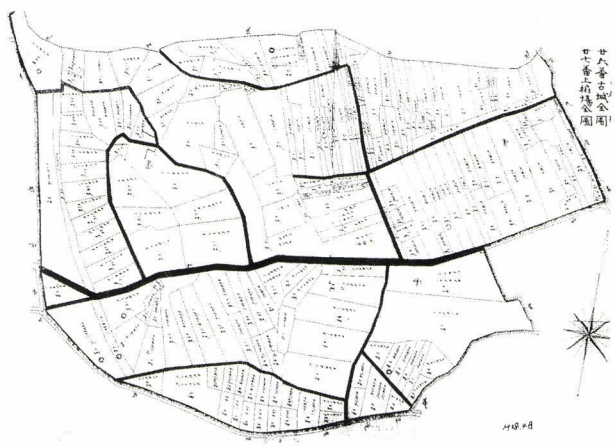
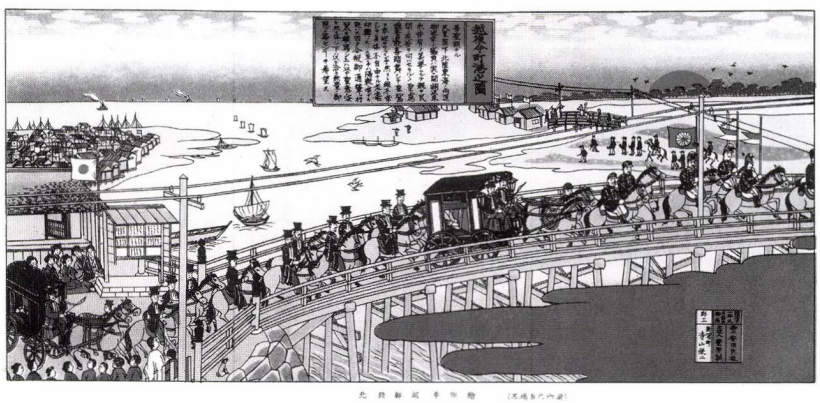


図７　長峰城跡付近の公図（明治期）

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

北陸御巡幸
明治天皇聖跡



巡幸記念錦絵　巡幸の列は荒川橋を渡る

明治天皇は明治初年から一〇年代にかけて、「六代巡幸」と言われる国内巡幸を一か月から二か月かけて行っている。これは維新後の世情が不安定で、天皇が全国を巡幸し視察することで明治政府の基礎を固めようとしたものである。また道中、政府の要人による帝王学を行うという側面もあった。

その一つ「北陸・東海巡幸」は、明治一一年八月三〇日東京を発し九月一九日に新潟に到着。復路北陸、京都へ向かうというものであった。その間、往路では新井別院と高田で宿泊、柿崎の浄福寺では往路、復路とも宿泊している。そして北陸への最初の宿は、長浜の彦治右ェ門（現・民宿の屋号）であった。

これらの「聖蹟」は、大正八年制定の史跡名勝天然記念物法によって「明治天皇聖蹟」として文化財の指定を受けることになった。昭和に入り天皇の神格化や軍部の台頭によって急激に増加し、昭和一一年には御巡幸六〇年に当たったため、聖蹟指定が一気に増え、新潟県では史跡指定の九五％を「聖蹟」が占めたという。また、指定外の所では町村の教育会によって、「明治天皇聖蹟」などの碑が建てられた。これらは、戦前・戦中には先勝祈願の対象となり、日を決めて礼拝していたところもある。

聖蹟碑は敗戦によって昭和二三年に史跡指定が解除され、「史跡指定」・「文部省」という文字の削除と維持保存に行政は関与しないことになった。

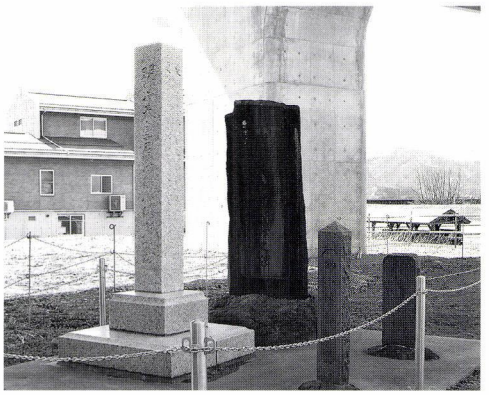
しかし他地域はともかく、上越地域では破棄されることはなく、むしろ大切に守られてきたのではないかと思われる形跡がある。その理由には言及しないが、これらが残されてきたことによって、明治という時代から日本が軍国化していく過程や、今だに碑の周辺を清浄に保とうという日本人の心の奥底が垣間見えてくる。



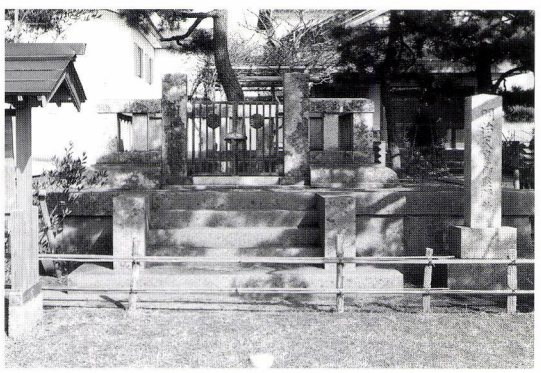
明治天皇御駐輦(ごちゅうれん)記念
福永家の跡に直江津郵便局を建設するにあたって局で整備



御前水(ごぜんすい)
高田行在所(あんざいしょ)とともに附(つけたり)として指定
旧中央病院構内

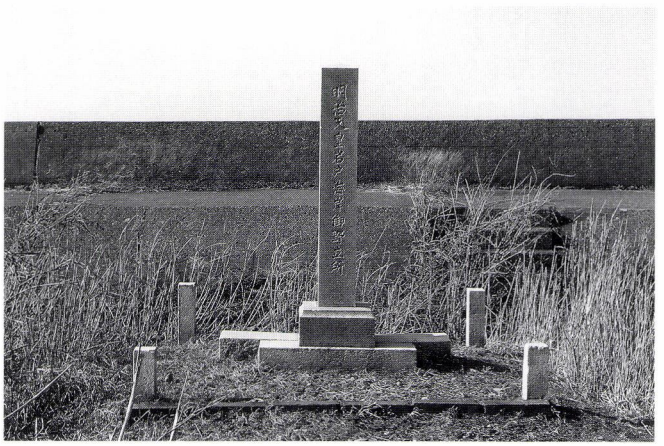


明治天皇石澤小休所趾(しょうきゅうしょあと)
和田公民館前　新幹線の橋脚工事で新たに整備された





右上　明治天皇聖蹟碑
　　昭和 11 年八千浦村教育会によって建立
左上　明治天皇柿崎行在所趾　浄福寺
　　火災で消失したため玉座の跡を玉垣で囲んである
右　　明治天皇岩戸海岸御野立所(おのだてところ)
　　郷津海岸



発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえち）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

五月一四日の夕方、水族館休館セレモニーが行なわれました。

三八年前に上越市立水族博物館が建てられたのですが、小生はオープン時より〝しんきんの営業係〟として夏の間、夕方に集金に来ていました。とんでもない入場者数で集計が合わなく大変だったことを思い出します。

今回、館長の櫻さんに〝インタビュー〟をお願いしました。

来年の初夏にはオープンします。

地域の皆さんが好奇心を持ち、宣伝マンになり、盛りたてていきましょう。

（梅田）

目　次

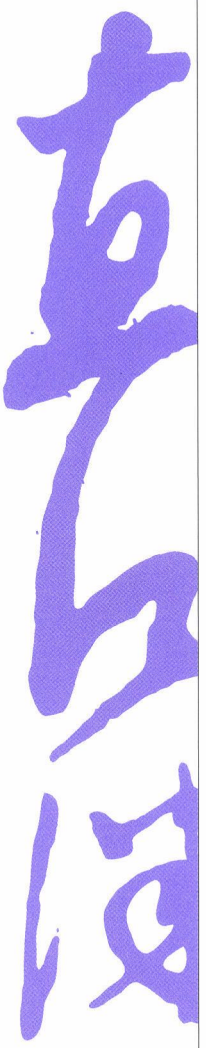
特集　ロングインタビュー
　新水族館を核にしたまちづくりを考える　4
国府―春日山―府中―直江津の空間を考える
　公図を読む―土地に刻まれたまちの歴史　23
巻頭エッセイ
　私の〝直江津グラフティー〟笠原謙二　2
歴史は「今日」への手紙
　北陸巡行　明治天皇聖蹟　29

「直江の津」
第一四巻一号　通巻四〇号
発行日／平成二九年六月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信栄社
　電話〇二五（五四五）〇二〇二
　上越市中央二―八―一
制作協力・北越出版

2017・1号

直江の津

発行／平成二十九年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円